# 読者のページ

## 文化と心

環境事業局　中島守正

先日の新聞に、阪大の米人講師がジーパン娘には講義できないという記事が載った。「諸君はファーストクラスの女性になるよう努めるべきだ。セカンドクラスの男性の格好をすべきでない」といい、もしいれられなければ阪大を去るという。アッパレさわやかではないか。

かつての高校生の長髪禁止論争などには、大人の「正しい」と信ずる論理のおしつけがあり、師の弟にたいする上下の意識が感じられる。しかし、このガンコ先生には、学生の人格を尊ぶ精神がある。似て非なるものだ。

一方の学生は「服装を通した女性べっ視だ」と反論する。思うに、よくどこかで押しつけられる、差別反対を趣旨とするビラには、『差別すること』と『区別すること』がまるで判っていない論理を展開していることが多い。男と女、大人と子供を区別することが、差別でないと同じように、常識と非常識、礼儀と不礼を区別するのも、文化的水準なのではあるまいか。

わが横浜には、文化施設が少ないというが、施設が文化をつくるのではなく、文化を解する心が文化（施設を含めて）をつくるのである。しかし、礼節を外国人から説かれているのでは、いささか心もとないが『文化が創造とその主体の問題』である以上、文化について語れば、自らが何をどうするのかを語らねばならない。

古くは『見えない神の手』がつとめていた文化の予定調和を、現代では管理機構つまり行政府がそれに代っている。だから横浜市役所よがんばれと、山田先生はおっしゃる。

さればとて『住民参加』、『住民の知る権利』が叫ばれる中で、官僚システムにどっぷりつかり、官僚的作文を乱発する私には先生の期待する自己変革などできそうもないのである。

残された道はないのか。いや、一つだけありそうだ。仲間もいる。みんなとプランを練って、次の文化特集には、皆さんに報告できるものにしたいと思っている。

## 計画的都市づくりを

道路局　樫尾正志

初めて私が、横浜を訪れたとき、まず印象づけられたのは、電車の窓から見える街並みやコンテナ車がじゅずつなぎにならぶ幹線道路、その想像を絶するほどの雑然としたありさまであった。

仕事の場にあって数年を経、そのありさまにも慣れっこになってしまった今では、むしろこの雑然さこそが本来の横浜をかたちづくりあげてきたものであって、そのエネルギーの象徴でもあることや、他方、これと取り組んでいかなければならない立場にある行政の側のある種のむずかしさをも、おぼろげながら理解できたつもりになってはいるものの、やはり残念に思えてならないことが少なくない。

端的にいえば、本市の二大商業集積地である、横浜駅西口周辺と伊勢佐木町が飛び離れた「点」の状態のままにあること、そしてこの間を含む中心部を通すよりほか港湾貨物を運ぶ大型車両をさばく方法がない状態のままに置かれていることだ。

これらに関しては、既に本市の六大事業の中においても、その指摘がなされているところであり、これに対する施策が具体的実現の過程にあることは、本市の姿をより望ましい方向に形づくるうえで大きな意味をもつものといえよう。

時代環境の変化に伴う量から質への転換が求められる中にあっても、これらの計画的都市づくりの基本的性格としての重要性は、今後においても十分な存在意義を有するものであり、そのより一層の着実な形での推進こそ必要と考える。

〈あとがき〉

この号の編集にあたって、多くの方々に取材した際、よく口にされた言葉に、「素人」と「専門家」という言葉があった。

先日、ある事件が起こった。Mさんは妊娠したと思って病院に行った。検査の結果から、医師は妊娠ではないと判断をした。二、三度その往復があった後、四ヵ月目に、彼女は流産した。彼女の夫が、医師に会って「どうして間違いが起きたのか説明してほしい」と頼むと、医師はドイツ語の書き込まれたカルテをみせて「こちらには手落ちはない」と説明した。ドイツ語と医学上の専門知識を前にしては、なかなか納得のゆく気持にはなれなかったという。

とかく、専門的知識というのが素人と専門家の間に垣根をつくるようだ。「わかりやすく説明をしてほしい」という素人である患者の気持ちを受けとめてくれる医師の姿勢が信頼感を呼びおこすのではなかろうか。

〈中川〉